

へりくだる神

フィリピの信徒への手紙 2 : 1 - 11

信仰の戦いというものがあります。信仰を持つと周囲の人たちと価値観の違いで、違和感を感じたり苦しい思いをしたりすることがあります。ある高齢のクリスチャン婦人がいました。その方が亡くなってそのお葬式に、教会の仲間が参列しまして、遺族の方々と思い出を語りました。「おばあちゃんは、受難週の間イエス様の苦しみを覚えて、毎週バスで教会に通うのに、できるだけ歩いてバス代を節約し、イースターの特別献金としてささげていたのですよ」とお話しした時に、「そんなしみつたれた話…」と、遺族の方に嫌な顔をされたそうです。向上心を持ってより豊かになることに価値を置く人たちにとっては、理解できない話だったのでしょう。信仰の戦い…ありますよね、色々。

パウロも信仰の戦いについて語ります。フィリピの信徒への手紙 1 章の 27 節から 30 節までのわずか 5 節の間に、「戦い」という言葉が 4 回も出てきます。「反対者」という言葉は 2 回出てきます。信仰の戦いとは、どのような反対にあうことなのでしょう。それは律法主義という反対です。道德によって「良い」、「悪い」を裁き、自分の力で良い人になっていこうという上昇志向…。まともな考え方のようですが、福音はそのようには考えません。福音は義認と聖化です。別の言い方をすれば、罪のゆるしと新しい命。全部、イエス様からいただくということです。ここには裁きは一切ありません。あるのはゆるしですから。この福音を守る戦い…。戦いというのは相手を否とし、己を是とすること、つまり裁きですが、でも信仰の戦いは裁きません。裁かない戦いです。

パウロがフィリピの教会へあてて手紙を書いたのには訳がありました。パウロにはひとつの危機意識があったのです。パウロは牢屋に入れられていました。いわゆる獄中書簡です。今まで幾度も投獄されてきましたが、今度ばかりは死刑は避けられない、そういう予感がありました。さらにフィリピの教会には争いがありました。4 章にはエボディア（ユエディア）とシンティケ（スュンテケ）という女性の名前が出てきますが、彼女たちはパウロに与みする人たちと対立していたようです。名前を聞くたびに心が痛む人たちです。さらに 3 章には律法主義者のことが、「犬ども」、「よこしまな働き手」と大変辛辣な言葉で語られます。パウロに嫌われていると感じている人々がいたらしいのです。パウロも人間ですから、言葉が過ぎることがあったようです。自分が原因で引き起こした人々の苦しみに胸を痛めていたらしいことが手紙の文面から推測できます（1:5-11）。善悪を見極め、自らを律していこうという律法主義／道德主義／上昇志向は教会の外にあるだけではありません。教会の内部にもあって、互いに裁き合うことが起こっていました。こうした教会内の不穏な様子に、死刑を前にしたパウロにはもはやできることが何もない。そういう切羽詰まった思いがありました。

これが、パウロがこの手紙を書いた動機です。パウロの心からの願いは「一致」でした。この実現を見て喜びたい。これがパウロの願いです。2 章 1 節 2 節、「そこで、(もし) あな

たがたにいくらかでも、キリストによる励まし（があるのなら）、（もし）愛の慰め（があるのなら）、（もし）“霊”による交わり（があるのなら）、それに（もし）慈しみやあわれみのところがあるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、私の喜びを満たしてください。」ものすごく、くどくどとのべています。パウロの一生懸命さが表現されています。要はこうです。「義認と聖化、罪のゆるしと新しい命に生きているのなら、教会一致の実現を見せて、私を喜ばせてください。」

さらに、教会一致のためにはどうしたらいいかが続きます。3節4節です。「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。」一致のためには、「他人のことにも注意を払いなさい」と言うのですが、ここでは決して、「あなたのここがいけない」とか「何々が悪い」と、律法的に裁くために「注意を払え」と言っているのではありません。ここで払うべき注意は、相手の優れている点です。

この齢になると若い人の成功が喜びです。若い人がうまくやっていたり、しっかり生活していたりするのを見るのが喜びになってきました。昨日は妻と一緒にWくんのアパートを訪ね、そのあとレストランで食事をしました。部屋に行くと生活の様子がよく分かるものです。儉約しながら、工夫しながら、努力しながら、楽しみながら立派にまじめに生活しているのを見て安心しました。本人を前にして言うのもなんですが、Tさんが良い説教をすると、自分の説教よりもうれしいものです。神学校の学生たち、カウンセリングに来る若者たち、みんな苦しみの中にも人生の手ごたえを感じて生きていってほしいと願うのです。死を予感すると、若い世代の成功が喜びとなるのかもしれない。

死を予感していたパウロには、他人の信仰の成功が喜びでした。他人が自分のできないことをやる。他人が自分よりもうまくやる。若いころには嫉妬だったことが、喜びになるのです。相手を自分よりも優れた者と考える（2:3）。それは喜びです。私たちが言えばどういことでしょうか。信仰歴の浅い人や洗礼を受けていない人を、自分をよりも優れた者と考える。後のものが先になり、先のものが後になる（マタイ 19:30、20:16、21:31、マルコ 9:35、10:31、ルカ 13:30）。これが一致のための戦い方、裁かない戦い方です。

この相手の優れている点を見て喜ぶという信仰の戦いの原点は、イエス様にありました。それが6節以下——「キリスト賛歌」と呼ばれています——に書かれています。この箇所のキーワードは二つです。一つは「自分を無にして」（2:7）。もう一つは「従順」（2:8）。

「自分を無にして」と聞くと、わたしたち東洋人は何か崇高なものを感じます。けれどもこの本来の意味は、「無駄にする」です。先ほど述べたことですが、パウロは自分の死に際に「教会一致の実現を見て喜びたい」と言いました。その同じことを16節の後半から17節で、言葉を継いで述べています。つまり教会の一致が実現するならば、自分の歩みや労苦が「無駄」にはならない、と言っているのです。しかも「無駄」という言葉を2回も使って強調しています。そして実は、この「無駄」という言葉は、イエス様の「自分を無にして」と同じ言葉なのです。イエス様はご自分の人生を無駄にされたということです。（パ

ウロが自分の歩みが無駄にならないと言うのには、それがわかるのは「キリストの日」であって、それまでは、キリストにならって、無駄になるという覚悟があるのです。)次に「従順」の意味ですが、これは支配されることを意味します。人にいいように利用されて、ぼろ雑巾のように捨てられるという意味です。無駄にされ、利用され、ぼろ雑巾のように捨てられる。「へりくだり」、「謙虚」ということは美德ですが、イエス様はそのような模範ではありません。「今はへりくだっておれ。そうすれば最後には一番になれる。」というような、出世戦術ではないのです。キリスト者の信仰戦略が成功するかどうかは、実に、無駄に利用されるということにかかっているのです。

このように見てまいりますと、キリスト者の裁かない戦いというものは、大変厳しいもののように思われます。しかし最後に、このことが実に容易であることをお話しして説教を終りたいと思います。そのヒントは 5 節にあります。パウロはこの箇所には二つの意味を持たせています。ここには二つの文がありますが、日本語訳には表れていないこととして、ギリシャ語本文では前の分が本文章で、後ろの文は関係代名詞で、前の文に結びけられているのです。その結び付け方で、二通りの意味が可能なのです。週報の表紙に二つの訳を書きましたのでご覧ください。第一は、「キリスト・イエスの中にあるこのことをあなた方の中でも思いなさい」です。こう訳すと、キリストを模範(モデル)としなさいという意味になります。第二は、「キリスト・イエスの中で、このことをあなた方の中で思いなさい」です。こう訳すと、キリストと結びついて(ユニオン)行いなさいという意味になります。モデルとユニオン。二つの意味が重ねられているのです。単なるモデルなら、「私にはできません」ということになるでしょう。けれども、パウロの場合、モデルだけでなくユニオンもあるのです。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ 2:20)。少し前に戻りますが、フィリピの信徒への手紙の 1 章 8 節で、パウロがどれほどフィリピの人々を愛しているかを語っていますが、ここで「キリスト・イエスの愛の心で」は直訳すれば「キリスト・イエスのはらわたの中で」になります。こうしたパウロの文言にはキリストとの一体感が現わされています。

イエスがわたしの中で生きておられる。もちろんこれは決断を持って信じるほかないことです。論理的証拠も、感覚的実感もありません。けれども信じると決めて信じるとき、結果がついてきます。つまりイエス様が、「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」(マタイ 11:30)とおっしゃるように、無駄に利用され棄てられるという戦略は、イエス様と二人三脚で歩む心の軽やかさをもって、裁かない戦いに勝利することになるのです。

パウロは死刑を目前にしています。17 節では、「たとえわたしの血が注がれるとしても」とそのことをほのめかしています。しかも教会の体たらく。自分のやってきたことが無駄になるということはほぼ確実。その中でキリストのようになる、キリストが体の中にいてくださることを信じることによってキリストのようにぼろ雑巾になれる、人々を——論敵をも——自分より優れた者とする、軽やかにそうすることができる、そうすることで、裁き合う世の中であって、裁かない戦いは勝利するのです。